

『大いなる看取り 山谷のホスピスで生きる人びと』

中村智志 著 新潮社 1,680円(税込)

看取りを通じて, 「生きる」ことを考え直す

会員 寺田明弘 (60期)



東京山谷の労働者街のど真ん中に作られたホスピス「きぼうのいえ」についてのノンフィクションである。行き場を失った人たちが自分らしく過ごすドヤ街の中にある終の棲家での、入居者やスタッフなどにまつわる様々な人間模様を丹念に描いたものである。

著者は、『段ボールハウスで見る夢』で講談社ノンフィクション賞を受賞した経験を持つ週刊朝日の記者である。この本は、何年もかけて綿密かつ丁寧に取材をして書き上げた著者渾身の作品である。

「きぼうのいえ」は施設長である山本雅基さんと美恵さん夫妻が、2002年行き場のない人たちが最後の時間を生きるための場として作ったホスピスである。

入居者には、波乱万丈の人生を生きてきた人が多い。蒸気機関車運転手、炭鉱夫、捕鯨船員、シベリア抑留経験者、七三一部隊、やくざ、料亭の板前、子守など様々な経歴を持つ人たちがいる。彼らの多くは、身寄りがなかったり、あったとしても連絡を取ることができなかったりする。「きぼうのいえ」は、そのような人たちの最後の時間を、「他人が」看取る場である。

この本では、山本夫妻、スタッフ、看護師、ヘルパーなどが家族のように寄り添い心を通わせ、最後に自分らしい生き方を取り戻して亡くなっていく、そのようないくつもの看取りの姿が描かれている。

「ここは素人ばかり。こういうの、許される?」、 「調子はどうだい?」「オー、ベリーグッド」、 「目を開けるのがしんどいかなあ、そうしたら、開けてあげる。ピッ。見えた?」、 「逝きなくなったら力を抜いていいからね」。こうした入居者とスタッフとのやりとりに表れているように、看取る人も看取られる人も自然体なのである。

筆者は「きぼうのいえ」でスタッフとして勤務していた経験がある。この本は、内部の人間から見ても驚くほどに見事に「きぼうのいえ」での生活の雰囲気を伝えている。

この本は、日々の業務に追われ、「生きる」ことへの意識が薄れがちな毎日の中で、看取りを通じて、「生きる」とはどういうことなのかを考え直させてくれる一冊である。